

しろたけじょう  
城岳城跡

福田 一志

### 1 奈留島の歴史的背景

城岳城は、長崎県南松浦郡奈留町の中央部に位置する城ヶ岳（標高 186m）の頂上にあり、『日本城郭大系』によれば「奈留氏の居城であり、のち五島の支城となる」とある。

奈留町は五島列島の中央部に位置し、島の形がヤツデにたとえられるように、奥深い良港を備えた島で、古代・中世以来海の玄関口として果たしてきた役割は大きい。奈留についての文献的に初出なものとして、承和九年（842）『平安遺文』（註1）、仁寿3

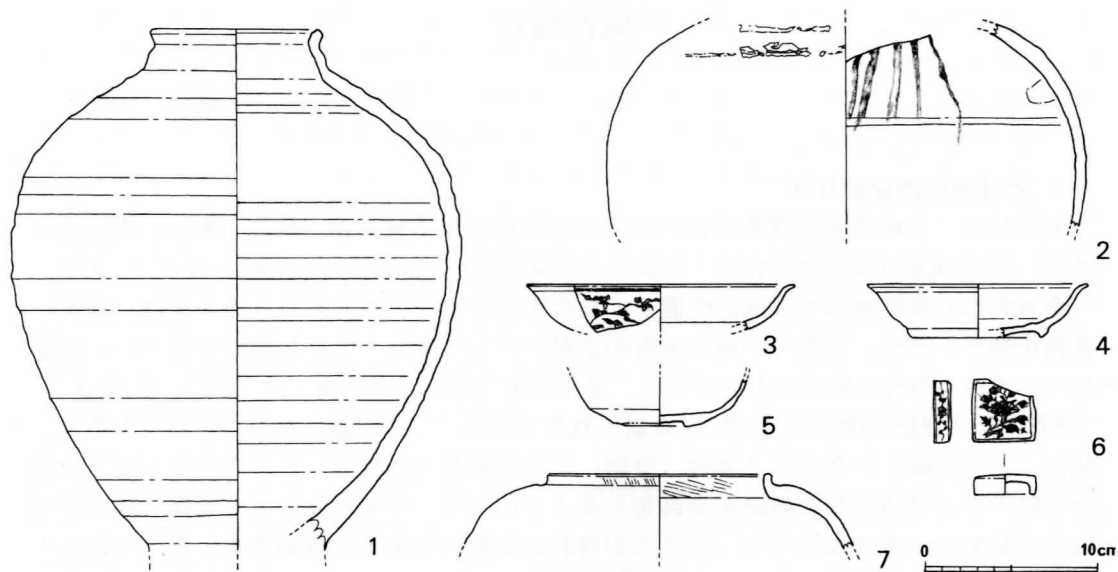
（853）年『智証大使伝』（註2）、貞観十八年（876）『三代実録』などの記述であろう。特に『三代実録』に見える上鳴神（奈留）が神島神社（小値賀）とともに従五位下を授けられたことは遣唐使の航路が南路をとるようになり、中央においても五島、特に奈留島と小値賀島が重要な地となったことが窺われる資料である。奈留はその後、奈留氏を名乗る者が中世に登場し、多くの文献に登場するようになる。特に14世紀にはかなりの勢力をもっていたらしく永仁六年（1298）青方・志佐・奈留の三氏が鎌倉方の使者と接触した事実がある。14世紀には永徳四年（1394）下松浦住人等一揆契諾状の中に奈留氏の名が見え宇久氏を中心とする土豪集団の中にいたことが知られる。遣唐使以来、奈留島が中国への渡航の際の重要な地として確認される資料として、15～16世紀代に勘合船や遣明船の停泊地になったことや、奈留氏が幕府命で勘合船や遣明船の警護を命じられた事実からも窺われる。また、奈留の海安寺は貿易の取引所としての機能をもっていた可能性がある（註3）。五島列島の文化が海を介した文化を形成していたことは、その取り巻く環境をみても既成の事実であるが、その中において、五島の中央に位置する奈留島の存在を今ひとつ考えていくことが、五島の歴史を知るうえで重要なことと感じる。

### 2 城岳城調査歴と遺物

1998年・1999年に無線塔建設にともない一部調査を実施したが、既に削平を受けており調査区における遺構の検出はなかった。縄張りについては調査されておらず、城の規模等についても不明な点が多い。遺物は表土下に岩盤に張り付くように出土し、16世紀後半の物を中心に出土している。遺物の出土からこの地になんらかの施設が構築されていたことを示すに足るものであった。山頂部より北側もすでに削平されてはいるものの平場があり、頂部とこの平場が城としての範囲であったと考えられる。今後、縄張り調査をおこない、城としての範囲を特定する必要がある。

### 3 出土遺物

黒釉壺1点・褐釉壺2点・染付皿1点・白磁碗1点・白磁皿3点？・土師質の小型壺1点（7）・染付の合子1点が出土している。1の黒釉壺は高台を欠くが、器高約31㍍、口径10.7㍍を計る。胴部の上位に最大径をもち、口縁部にかけて急速に狭まる。頸部は内傾し口縁部で急な折り返しを見せる。口唇部は丸く納めてあり、胴部の膨らみとは対



第1図 城岳城跡出土陶磁器

照的に口径が小さいのが特徴である。また、外面を波状に整形するのも特徴であろう。釉薬は茶褐色の釉を高台付近を残し施釉し、その後外側に黒色釉を掛ける。内部は茶褐色の釉のみである。胎土は、灰青色で堅緻である。機能について限定する必要はないが、一般的には茶壺としての機能が考えらる。2の褐釉壺は胎土は灰青色で白色の微粒鉱物を含む。外面に黒茶褐色の雑釉とでもいべき釉を掛け、内面は露胎である。肩の部分に目跡が残ることを特色とする。3の皿は小野編年の染付皿B2群、4の白磁皿は森田編年のE群に相当し、一乗谷朝倉氏遺跡に出土例をもとめることができ、16世紀後葉に位置づけられよう。また5の碁笥底の白磁皿もこの年代に比定できるであろう。6の合子は上面に菊の染付をし、側面にも花を描いている。中国産の染付と思われる。

以上の遺物から、出土遺物については16世紀の後葉の遺物として捉えることが可能である。16世紀の後葉といえば、奈留氏が遣明船の護送をおこなっていた時期にあたる。

遺物の内容から見てこの場がかなり生活感のあるものであり、居住できる構築物があった可能性をも指摘できる内容であった。標高186㍍という所において、船載陶磁器を出土するという城岳城の存在については、遺物からも検証でき、島嶼部の標高186㍍という所にこのような遺物が存在するということに、奈留氏の交易範囲の広さを実感させられる。

#### 4 まとめ

五島列島といえば、遣唐使の最後の寄港地、三井楽がよく知られるところであるが、先述したように奈留島もまた古代以来重要な位置にあり、他の地域以上に頻りに文献に登場する島である。城岳城からの眺望は四海をよく見渡すことができ、船舶の航行をはっきりと捉えることができる。しかも、五島列島の中心に位置するという地理的条件が、この島及び城岳城の重要性に繋がっているものと思われる。

【註】

- 註1 『郷土奈留』によれば、承和九年（842）入唐僧惠雲は、博多から値賀島鳴浦に至り、船首李処人等は、唐から乗ってきた旧船を捨てて島の楠木を切り、三ヶ月で新船を完成させ六日で唐温州楽城県に着く、としている。原典は『平安遺文』
- 註2 『郷土奈留』によれば、延暦寺僧円珍は、入唐のため値賀島鳴浦に停泊、とある。原典は『智証大使伝—天台宗延暦寺座主円珍伝—』
- 註3 『戊子入明記』によれば、「・・・床木のこと奈留海安寺門前在・・・硫黄のこと五島奈留海安寺寺三千斤・・・」とあり、硫黄等南海の産物等を扱っていたことが理解される。つまり五島奈留氏の行動範囲がいかに広大であったかを示す内容である。

【引用・参考文献】

- 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No 2 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No 2 日本貿易陶磁研究会  
奈留町教育委員会『郷土奈留』